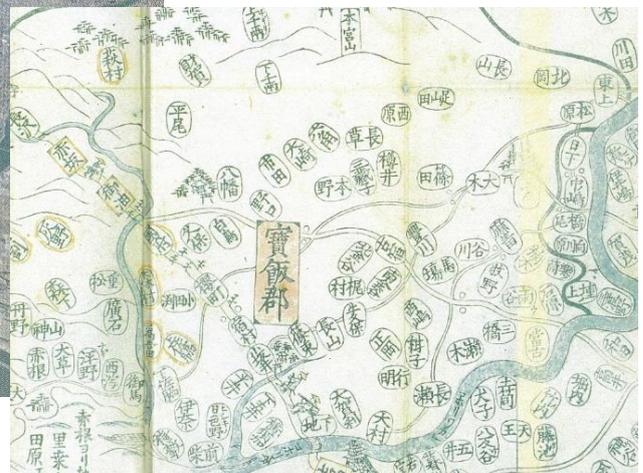


とよかわの地名から防災を考える

—地名に隠された災害情報—



■豊川市域の航空写真と江戸時代の村々

- 1 地名から防災を考える・・・P1
 - (1) 地名から防災・減災を考える動き
 - (2) 地名に隠された災害情報
 - 2 とよかわの地名の成り立ち・・・P2
 - (1) 郡・郷の名前の由来
 - (2) 江戸時代の市域の村名と地名の由来
 - 3 地形と遺跡立地、集落立地、古地図等を読み解く・・・P5
 - (1) 地形図の読み取り方 (2) 遺跡立地の傾向と集落立地
 - (3) 名所図絵や古地図を読み解く
 - 4 自然災害に気をつけたい地名・・・P11
 - (1) 洪水 (2) 土砂災害
 - (3) 地震・液状化現象 (4) 高潮・津波
- <参考資料> ○参考文献 ○豊川市域の旧村名の由来一覧 ○小字図一覧

令和4年3月

豊川市防災センター

1 地名から防災を考える

(1) 地名から防災・減災を考える動き

日本は、地震や津波、火山災害が発生する頻度が他国に比べても比較的高く、この地域では南海トラフ地震がいつ起きてもおかしくないとも言われています。また近年地球温暖化や気候変動等の影響により集中豪雨や大型台風の来襲などによる風水害のリスクも高まっております、こうした各種災害に対する日頃の備えが欠かせません。こうした中、防災を他人事



図1 土筒の水屋（市史より）

とせず、我が事として「自らの命、家族の命を守る」ための備えをする際に、まずは自分が住んでいる土地の成り立ちや過去の災害を知ることが大切です。

私たちの祖先は、みずからが住む地域でどのような災害が起こるのかを経験的に知っていました。伝統的な地域社会において、災害や生活にかかわる経験知は、信仰や年中行事、伝説、記念碑、文書などのかたちをとりながら世代を超えて継承され、それら「民俗知」が防災・減災に役立ってきたとされます（文化庁編 2017）。

市内の土筒や当古といったかつての霞地区における出水時の水屋（図1）や母屋2階への高所避難などもその一例と言えるでしょう。

戦後の高度経済成長を経て急速に進行した日本各地の都市化は、農村、漁村、山間部の地域社会を解体へ導きつつある中で、地域社会に受け継がれた「民俗知」の継承を脅かし、また都市化の進行は、「民俗知」の刻印ともいえるべき「地名」をも塗り替えつつあります。地名とは本来、災害危険性なども含めた土地の特性をよく表し、災害に対する警告にとどまらず「人間が大自然の中の存在であることを忘れないようにとの警告」を与える役割をもっていたとされ（谷川編 2013）、住んでいる土地の成り立ちや過去の災害を知るため地名に目を向けることは防災・減災を考える上でも大切であり、東日本大震災を契機として津波関連地名・記念碑等の調査も全国的に進んでいます。

(2) 地名に隠された災害情報

名古屋大学の福和伸夫教授は、東京、名古屋、大阪の三大都市圏の駅名や地名と地盤の関係性を考察する中で図2の「良好地盤地名と脆弱地盤地名の分類」を抽出しました。そして、これら都市では災害危険度の高い脆弱な低平地にまちを広げ建物を密集化・高層化したため大災害には脆いと警鐘を鳴らし、周辺の地名を思い浮かべて建物の耐震化などの備えを行っていく必要があると訴えています（福和 2010）。また中根洋治氏は、愛知県下の災害地名を考察する中で、豊川市域の災害に関連した地名として、「足（悪し）

由来	小分類	良好	脆弱																	
地形	山地	山	尾	根	岳	嶽	嶺													
	台地	岡	丘	台	坂	上														
	傾斜地	傾	斜	地																
	みさき																			
	海岸・海																			
	水辺																			
	入江																			
地物	窪地・谷地・低湿地																			
	河川																			
	湖沼																			
地質	人工物																			
	地質																			
植物	森林																			
	水辺の植物																			
	農作物																			
生物	水鳥																			
	水生生物																			
当てる	山の生物																			
	そね																			
	や(谷)																			
	くぼ(窪)																			
	くて(淋)																			
	うめ(埋)																			
	ず(洲・州)																			
	すか(洲処・州処)																			
	ふち(淵)																			
	いり(入)																			
状態・現象・動作	つ(瀆)ゆ																			
	高低																			
潮汐	高上																			
	水																			

図2 良好地盤と脆弱地盤地名の分類

山田]、「牛（憂し）久保]、「瀬木（流れをせき止め）」などを取り上げ紹介しています（中根 2012・谷川編 2013）。

現在の町名等には、区画整理や住宅開発に伴い新たに命名されたものもあるため、地名の考察にはなるべく古い時代の名称（大字名・小字名等）を確認する必要があります。参考資料として、旧豊川市域では『新編豊川市史』第7巻に戦前の小字図が掲載されている他、旧御津町については『御津町史』資料編下巻にやはり小字図が掲載され、旧音羽町については『音羽町誌』に伝承も含む小字地名の解説が掲載され、旧小坂井町については『小坂井町誌』に地名考として小字図が掲載されています（巻末小字図参照）。また現在の町名や小字名については、インターネットの地図情報で地図と航空写真を比較して町名や小字名を確認すれば、どのような地形・土地利用の場所にどんな地名があるかも簡単に確認できます。

皆さんも、この冊子を参考としながら、自分の住んでいる場所や地域の地名の由来や土地の成り立ちを一度調べてみてください。併せて、国土地理院のホームページで「地理院地図」を開き、自宅が地形区分で凹地・浅い谷や旧河道にあたらないか等を確認してみてください。そして市ホームページ等で豊川市洪水ハザードマップを開き洪水の際の浸水深を確認するとともに、豊川市防災マップを開いて自宅周辺が土砂災害の危険区域に入っていないかや、地震の震度分布や液状化危険度、津波浸水深などをチェックし、自宅や通勤・通学経路の災害リスクを、自分だけでなく、是非、家族の皆さんと一緒に確かめてみてください。

2 とよかわの地名の成り立ち

（1）郡・郷の名前の由来

豊川市は、平成の大合併により古代から現代まで続いた宝飯（宝飫）郡の主要部を占めることとなりましたが（豊川左岸の旧八名郡域も一部含む）、残念ながら行政区の名称としての「宝飯」は平成 22 年 2 月の小坂井町との合併によって姿を消すこととなりました。

現在の愛知県三河地域は、7 世紀後半に豊川流域の穂国（ほのくに）と矢作川流域の三川国（みかわのくに）が統合され三河国となりましたが、「ほ」の名称は穂評（ほのおり）として受け継がれ、8 世紀となり令制三河国が成立するに及んで穂評は宝飫郡（ほおぐん）となり、後に「飫」が「飯」と誤記され宝飯郡（ほいぐん）になったと考えられています。

平安時代中期に成立した『和名類聚抄（和名抄）』によれば、宝飯郡には形原・赤孫・美養・御津・宮道・望理・賀茂・度津・篠束・宮島・豊川・雀部・駅家（度津周辺か）の 13 郷が記されており、このうち形原・赤孫・美養は現蒲郡市域に該当し、それ以外の 10 郷が現豊川市域にあったと考えられています（図 3）。また浜松市の伊場遺跡出土木簡から、奈良時代には宮地駅（宮道周辺か）が置かれていたことも知られます。よって、豊川市の名称は近代の豊川町、近世の豊川村、古代の豊川郷にまで遡ることができ、「とよかわ」の地名の由来は、かつて豊川（飽海川とも呼ばれた）の流れが篠束・牛久



図 3 古代宝飯郡郷名比定（小坂井町史より）

保・豊川の近くを通っており、この流れをかかえていたところから、「豊かな川」・「ほの川」として「豊川」とよんだのではないかと考えられています。

(2) 江戸時代の市域の村名と地名の由来

江戸時代の「三州八郡地理之図」(図4)に描かれているように、江戸時代には旧豊川市域に47ヶ村、旧宝飯郡一宮町域に17ヶ村、同音羽町域に3ヶ村、同御津町域に12ヶ村、同小坂井町域に5ヶ村の計84ヶ村に及ぶ村々があったことが知られます(時期や数え方により数に若干の違いがあります)。

これら村名の由来については、江戸時代に刊行された『三河国名所図

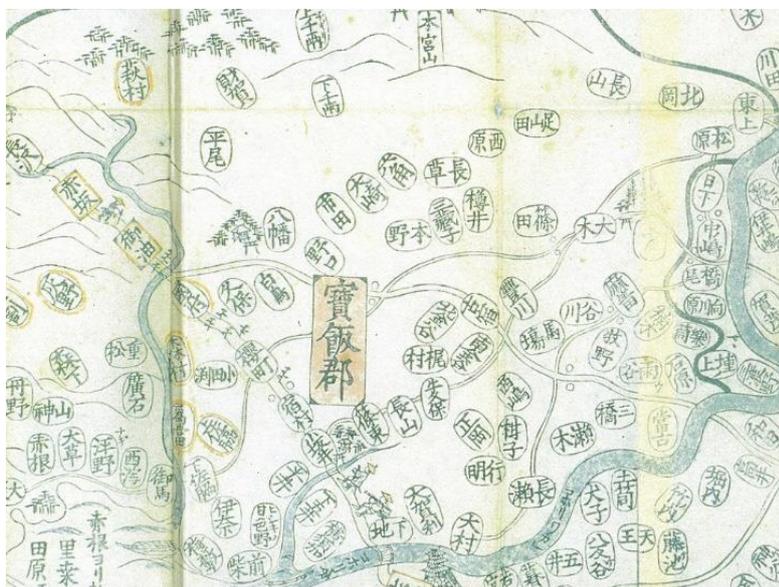


図4 江戸時代の絵図に描かれた市域の村々(豊川の絵図より)

絵』や明治時代に刊行された『三河国宝飯郡誌』をはじめ戦前から戦後にかけてまとめられた地元の各地誌に地名考証の記述がみられるものがあり、豊川市郷土史研究会による「豊川市内の旧町村名の起源考」『豊川史話』第9号や、各市史・町誌(史)、それらをまとめた地名辞典等を参考とすれば、諸説ありながらも巻末の「豊川市域の旧村名の由来一覧」のようにまとめることができます。

ちなみに、巻末の一覧の説明文に下線が引いてあるのは、地名の由来に地形・土地利用や災害に関連した事項が含まれるものであり、豊川市域の地名(村名・町名・大字名)の由来を紐解くと、故事にちなんだ由来以外にも、地形や豊川等の河川との関連で名付けられたと想定される地名が想像以上に多くあることがわかります。

このうち良好地盤地名としては「山」「岡」「森」などを含む地名が挙げられます。市内では、(上)長山村、(下)長山村、足山田村、北岡新田が段丘上や扇状地を中心に占地し比較的良好な地盤上にあると言えますが、帯川上流域の足山田村は「足」が「悪し地形」に通じるものとして災害地名の可能性が指摘され、また正岡村は低地の自然堤防上に営まれた集落で「岡」といっても地盤は必ずしも良好とは言えず、森下村は「森」の次に軟弱地盤地名の「下」が付くのでやはり安全とは言いきれません。

次に地形・地物・動植物などに由来し軟弱地盤が想定される地名としては「井」「鶉」「江」「川」「河原」「窪」「久保」「崎」「沢」「島」「瀬



図5 水田に囲まれた正岡の集落



図6 湧水を利用した平井の共同の洗い場



図7 崖地形を有する牛久保（岸下付近）

「田」「橋」「萩」「淵」「谷」などが挙げられます。「井」のつく樽井村、井之島村、小坂井村、平井村はいずれも地名と井戸（泉）との関連が想起され、小坂井や平井は、小坂井台地の下を流れる伏流水が湧き出る泉が段丘沿いにかつて多く見られたことから付いた名前と考えられています（図6）。「鵜」は鵜飼島村、「江」は江村（江尻村⇒江村⇒江島村）、「川」「河原」には豊川村、向河原村があり、いずれも豊川との関連が伺えます。また「窪」「久保」には牛久保村・久保村があり、ともに段丘の上段・下段のエリアを含む地名であり、崖の崩落や低地部の軟弱地盤に注意する必要があります（図7）。次の「崎」は大崎村、前崎（白鳥村の旧名）があり、舌状台地や扇状地末端の地形を表したものと考えられ、崖上であれば災害リスクは低いものの、崖近くや崖下では注意が必要です。

次の「沢」には長沢村があり山間の沢に因む名と考えられ、「島」には西島村、鵜飼島村、中島村、井之島村があり、いずれも乱流していた豊川の中洲状の地形との関連が伺えます。また「瀬」には瀬木村があり、川の瀬や堰に因む名と考えられ、中根洋治氏は「流れをせき止めた所」として災害地名としています。そして「田」には市田村、小田淵村、麻生田村、足山田村、篠田村があり、村内の水田地帯については軟弱地盤として注意が必要で、「橋」のつく三橋村、橋尾村も豊川の氾濫原に位置し相対的に地盤が悪く、「淵」の付く小田淵村も音羽川の旧流路が付近を流れていたとされ、こうした低地や水田地帯では集落は自然堤防等の微高地に営まれましたが、新たな住宅開発により水田等を埋め立て宅地とした個所では洪水や液状化にも注意が必要です。また萩村の「萩」は「土地が剥がれやすい」意味の崩壊地名の可能性もあるほか、「谷」地名には谷川村、雨谷村があり、ともに豊川の旧流路沿いの地名で、過去に水害にも見舞われた地域でもあり注意が必要です。

これら軟弱地盤地名のほか、川の名称として「佐奈川」の「サナ」は「七輪の火をのせる格子形の棚のことで水漏れ川を意味する」であるとか、山間の村である「千両（ちぎり）」は「ち切る」に通じ崩壊地名の一つであるとか、地名には防災・減災に生かせる各種情報が隠されている可能性があります。



図8 佐奈川上流部の水無し川の様子（荒子橋）

3 地形と遺跡立地、集落立地、古地図等を読み解く

(1) 地形図の読み取り方

国土地理院ホームページに「防災にも役立つ！地理院地図の使い方」という便利なサイトがあります。このサイトを使うとパソコンでもスマホでも簡単に自宅周辺の自然地形・人工地形の状況を確認することができ、図10の土地の成り立ちと自然災害リスク一覧を参考に、自宅が大雨の際の崖崩れや浸水の心配がないか、また豊川下流域の低地や沿岸部では台風の際の高潮や地震の際の揺れや液状化の心配がないかなどを簡単に



図9 地理院地図の自然災害リスク表示一例（古川沿い）

確認することができます。図9のように自宅周辺に位置を合わせ、地形の状況を確認してみてください。市内下郷地区であれば、自宅が自然堤防（黄色）にあれば微高地に立地すると判断できますが、旧河道（青色）や氾濫平野（薄黄緑色）、後背低地・湿地（青緑色）にあるようでしたら、浸水や液状化等のリスクが大きいことに注意を払う必要があります。

地形分類	彩色	土地の成り立ち	地形から見た自然災害リスク
山地	灰色	尾根や谷からなる土地や、比較的斜面の急な土地。山がちな古い段丘崖の斜面や火山地を含む。	大雨や地震により、崖崩れや土石流、地すべりなどの土砂災害のリスクがある。
崖・段丘崖	紫色	台地の縁にある極めて急な斜面や、山地や海岸沿いなどの岩場。	周辺では大雨や地震により、崖崩れなどの土砂災害のリスクがある。
台地・段丘	橙色	周囲より階段状に高くなった平坦な土地。周囲が浸食により削られて取り残されている。	河川氾濫のリスクはほとんどないが、縁辺部の斜面近くでは崖崩れに注意。地盤は良く、地震の揺れや液状化のリスクは小さい。
山麓堆積地形	濃灰色	山地や崖・段丘崖の下方にあり、山地より斜面の緩やかな土地。	大雨により土石流が発生するリスクがある。地盤は不安定で、地震による崖崩れにも注意。
自然堤防	黄色	現在や昔の河川に沿って細長く分布し、周囲より0.5～数メートル高い土地。河川が氾濫した場合に土砂が堆積してできる。	洪水に対しては比較的安全だが、大規模な洪水では浸水することがある。縁辺部では液状化のリスクがある。
凹地・浅い谷	薄緑色	台地や扇状地、砂丘などの中にあり、周辺と比べてわずかに低い土地。小規模な流水の働きや、周辺部に砂礫が堆積して相対的に低くなる等である。	大雨の際に一時的に雨水が集まりやすく、浸水のおそれがある。地盤は周囲（台地・段丘など）より軟弱な場合があり、とくに周辺が砂州・砂丘の場所では液状化のリスクがある。
氾濫平野	薄黄緑色	起伏が小さく、低くて平坦な土地。洪水で運ばれた砂や泥などが河川周辺に堆積したり、過去の海底が干上がったりしてできる。	河川の氾濫に注意。地盤は海岸に近いほど軟弱で、地震の際にやや揺れやすい。液状化のリスクがある。沿岸部では高潮に注意。
後背低地・湿地	青緑色	主に氾濫平野の中にあり、周囲よりわずかに低い土地。洪水による砂や礫の堆積がほとんどなく、氾濫水に含まれる泥が堆積してできる。	河川の氾濫によって周囲よりも長期間浸水し、水はけが悪い。地盤が軟弱で地震の際の揺れが大きくなりやすい。液状化のリスクがある。沿岸部では高潮に注意。
旧河道	青色	かつて河川の流路だった場所で、周囲よりわずかに低い土地。流路の移動によって河川から切り離されて、その後には砂や泥などで埋められてできる。	河川の氾濫によって周囲よりも長期間浸水し、水はけが悪い。地盤が軟弱で地震の際の揺れが大きくなりやすい。液状化のリスクがある。

図10 地形別土地の成り立ちと自然災害リスク一覧(地理院地図 HP 解説より)

したが、音羽川下流域にはかつては碁盤の目のように区画された条里制の水田が残り（図 12）、また当時の音羽川は国府のある台地のすぐ西側の低地から南方に延びる低地（御津町域の安藤川沿い）を流れていたとも言われ、国府高等学校の南東側の水田地帯には「船原」の小字名も残り、当時音羽川の河口近くには国府の外港が設けられ「御津」の地名の由来になったとされています。

また古代には、古代東海道沿いの篠束辺りに駅家が設けられ、豊川（当時は飽海川と呼ばれた）の渡しは「しかすがの渡」と呼ばれていましたが、平安時代中頃から水量の増加で難所となり、東西の交通は豊川の上流を迂回する新街道（俗に鎌倉街道と呼ばれる）に移りました。新たに豊川宿（現古宿町辺りか）が興り、東側（松原用水沿い）には豊川の流路の一つが流れ、古代～中世の遺跡でもある郷中遺跡（三谷原町）等を中継地として、二百数十年もの間、豊川宿経由で網の目状に乱流する豊川を渡河する新街道が東西交通の主流となっていたようです。

また戦国時代に市域では牧野氏が勢力を拡大し、東の今川、西の松平との間で攻防を繰り返しました。牧野氏は、当初牧野城（牧野町）を拠点として一色城（牛久保町）を攻め落とすと、瀬木城（瀬木町）、今橋城（豊橋市：後の吉田城）、牛久保城（牛久保町）を順次築いて東三河一帯に基盤を築きました。図 11 を見てわかるとおり、戦国時代の城館（図 11 の凸印）は、豊川や音羽川等の河川の旧河道沿いや臨海部に立地する 경우가多く、牧野氏に関わらず戦国期の領主は、防御の側面のみならず河川や三河湾の水運も重視して城館を築き領地の経営にあたっていたことがわかります。

なお、近世の村々の配置は図 4 の絵図のとおりですが、明治時代の地図で確認できる集落は、近世の集落立地を踏襲するものがほとんどで、河川沿いの低地でも自然堤防等の微高地上に集落が立地する 경우가多く、集落内の村役場や小学校、神社や寺院が揃う場所は同じ低地の中でも災害リスクが相対的に低い場所だと言えます。一方、都市化の進展により低地を埋め立てたり、山地を造成したりして新しく住宅団地が形成されている場合や新設の学校の場合には、災害リスクが高い場合もあるので注意が必要です。

豊川市防災センターのロビーに備えてある「今昔マップ」（図 13）は、明治時代の古い地図と現代の地図を瞬時に比較し、危険度カルテも表示される優れたものです。皆さんも一度防災センターを訪ねて、自宅周辺の明治時代の地形や土地利用の様子、危険度カルテを確認してみてください。



図 12 音羽川下流域の条里遺構（S32 年）



図 13 防災センターで楽しめる今昔マップ

(3) 名所図絵や古地図を読み解く

① 古代の「しかすがの渡」と現在の土地利用

江戸時代後期に刊行された『三河国名所図絵』には、平安時代に清少納言が三大渡しの筆頭に挙げ歌に詠まれた「しかすがの渡」のイメージ図が「志之須香渡古図」として図14のように掲載されています。図15のように、平安時代当時の海岸線は、JR東海道線辺りまで入り込んでいたと推定され、「しかすがの渡」は豊川市側の平井～小坂井辺りから豊橋市側の牟呂坂津辺りを結んでいたと考えられています。前芝（豊橋市）をはじめ河口部の集落は、往時は人の住まない島状の中洲であり、平井町や小坂井町の低地部の小字名には「広見島」「大島」といった地名が今も残っています。現在では、図16の航空写真に見られるように、かつて海が入り込みヨシやアシの茂る湿地であった場所近くの幹線道路沿いに工場、倉庫、店舗、病院、学校、介護施設などが立地しています。しかし、この辺りは豊川放水路や沿岸堤防整備前には、洪水や高潮、津波等の被害をたびたび受けた地域であり、現在でもそうした災害リスクを抱えていることを改めて認識しておく必要があります。

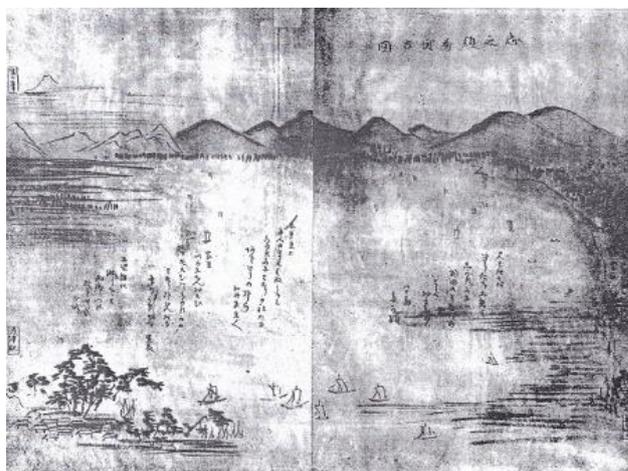


図14 志之須香渡古図『三河国名所図絵』



図15 古代の推定海岸線（松岡編 2018 参照）



図16 豊川河口部の現在の航空写真（豊川橋西方上空より：豊川市防災ドローン航空隊撮影）

② 和泉式部の歌に詠まれた緑野池と霞地区

『三河国名所図絵』には「八名郡緑野池」として、平安時代に和泉式部の歌に詠まれたとされる「緑野池」が描かれています(図 17)。近くの豊川の入江は「ロツパイ」と記され、現在の三上町西六盃・東六盃付近にかつて緑野池があったことが知られ、その右側には豊川の渡しの様子が描かれています。また、この地区には「間川」「南中島」「北中島」「沖」といった豊川に注ぐ間川沿いの低地にちなむ小字名が現在も残っており、現在六盃橋付近の県道沿いに和泉式部が「みどり野」を詠んだ歌の歌碑が建てられています(図 19)。

ところで豊川左岸には、金沢・賀茂・下条・牛川の4地区に霞堤(不連続堤)が今も残っていますが、昭和40年に豊川放水路ができた以降も、大雨のたびに霞地区では浸水被害を受けることがあります。緑野池のあった豊川市三上町の西六盃周辺は賀茂霞の差し口(開口部)にあたり、平成23年9月の台風15号(図18)や平成30年9月の台風24号の際にも浸水被害を受けています。また、金沢霞の差し口の地名は金沢町西峽(ニシザワ)で、三上町西六盃同様、やはり大雨のたびに差し水による浸水を繰り返しており対策が急がれます。



図 17 緑野池『三河国名所図絵』



図 18 西六盃付近の浸水状況(H23)
(国交省豊橋河川事務所 HP より)



図 19 和泉式部「みどり野」歌碑



図 20 三上町西六盃周辺の航空写真(三上橋南西上空より:豊川市防災ドローン航空隊撮影)

③ 赤坂の古地図と「大崩」地名

赤坂宿の幕末の古地図(図21)から、赤坂宿と長沢村の境には、かつて大崩(おおくずれ)と呼ばれた地名があったことがわかります。現在の赤坂町西縄手の音羽中学校のグラウンド辺り(図22の赤色楕円)と推定され、南西側の小山(図22の赤丸:古地図では丸山とされる)周辺には土砂災害危険箇所がいくつもあります。丸山の南西側では昭和38年頃の大崩で山中に割れ目ができ、その後地すべり防止区域に指定されて地すべりの安定を図る工事が行われ、現在は赤坂緑地公園(地すべり学習公園)として整備されています(図23)。

この大崩周辺の土砂災害に関する伝承として、北西約600mの長沢町栄善寺にある大如来像について「切山川の奥の大日嶽にあった西興寺に安置されていたものが、享祿3年(1530)8月の大風雨により山崩れで堂宇が流出し、音羽川を下り寺近くまで流されたものである」といった言い伝えがあります(三河国宝飯郡誌)。また「崩」に関連した市内の小字名には、平尾町に「木崩」(平尾カントリークラブゴルフ場内)が、また市田町に「崩」(赤塚山公園宮池エリア)があり、崩壊地名として注意を払う必要があります。

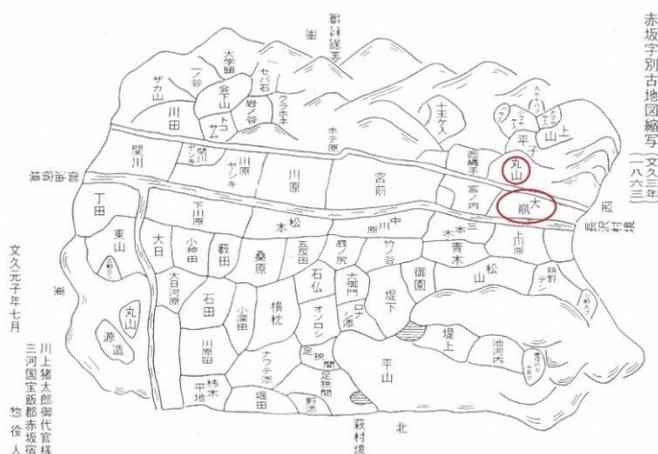


図21 赤坂字別古地図縮写(音羽町誌より)

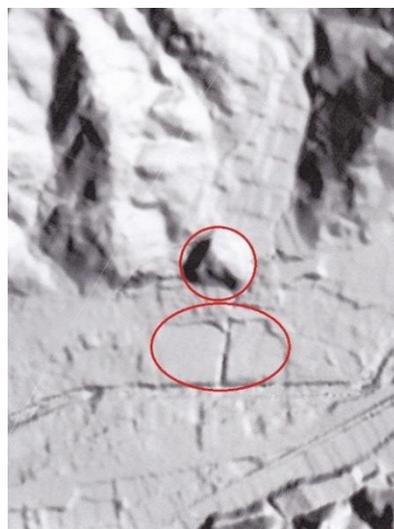


図22 地理院地図陰影起伏図「大崩」付近



図23 赤坂緑地公園



図24 音羽中学校周辺航空写真(豊川市防災ドローン航空隊撮影)

4 自然災害に気をつけたい地名

最後に、自然災害に気をつけたい地名として皆さんにも身近な小字（こあざ）名を取り上げたいと思います。豊川市域は地形上、北部山地や西部山地を中心とした山地・山麓部と、上郷（うわごう）と呼ばれる中央洪積台地、下郷（したごう）と呼ばれる豊川沿いの低地及び沿岸部の大きく3つの地域に分けられますが、その地域ごとに地形や土地利用に応じて小字名にも特徴が見られます。

まず山地・山麓部では山・沢・下・谷といった文字が小字名に含まれる場合が多く、上郷では野・屋・畑といった文字が、また下郷では下・田・川（河）・島といった文字が多く見られます。また豊川市域に特徴的な小字名として、市域で26か所を数える「貝津：カイツ」や、17か所を数える「荒古（子）：アラコ」があります（小字図等から拾い出し）。「貝津」は三河地方の特に山間部に多い地名で、一般的に屋敷などの土地の区画を意味する垣内（カイト・カイツ）に由来すると言われますが、市域では小河川沿いに分布する傾向もみられます。また「荒古（子）」は一般的に荒地を新たに開墾してできた田畑（新墾）を指すと言われ、上郷・下郷に共通してみられる地名です。この他、傾斜地・崩れ岸を表す「埴（ママ）」を付した埴上・埴（埋）下といった小字名も市内に6か所見られます。こうした地形や土地利用をよく表す小字名について、崩壊地名などのいわゆる災害地名も参考としながら、各種自然災害に気をつけたい地名を紹介します。

（1）洪水

洪水の危険性については、「豊川市洪水ハザードマップ 2017」を確認いただければ、各河川の計画規模（豊川及び豊川放水路については計画規模及び想定最大規模）の最大浸水深を知ることができます。想定最大規模では下郷の善光寺川流域（西島町から小坂井町にかけて）や三上・金沢の霞地区では5mを超える浸水となり、想定雨量である豊川流域の1日総雨量が600mmを超えることがあれば、各河川の堤防が決壊しなくても内水がはけずに浸水被害が広範に及ぶ可能性があります。よって、各河川沿いの地域及び下郷や沿岸部の低地では、洪水の際に自宅2階等への垂直避難が安全かどうかを事前に確認しておくとともに、旧河道を意味する古川や、カワラ（川原・河原・磧）といった小字名が自宅近くにある場合には、早めに冠水が始まる危険が大きいため、避難所等への避難の際に、早めの避難と冠水の危険の少ないルートでの避難を心掛ける必要があります。

なお、洪水については災害地名として「足」が「悪し」に通じるとして、小字名では小田渚町「足田」、八幡町「足洗」などにも注意が必要です。また別の災害地名「アワラ」に関連して下長山町「下アワラ」や小田渚町「荒原（アワラ）」、平井町「安原（アバラ）」といった低地の小字名にも注意が必要で、中根洋治氏によれば平成12年の東海豪雨では名古屋市西区で新川の堤防が決壊しましたが、その地名は「あし原町」であり、対岸の地名は清須市（旧新川町）の「阿原」とされます。また佐奈川右岸の蔵子1丁目交差点付近は大雨の際

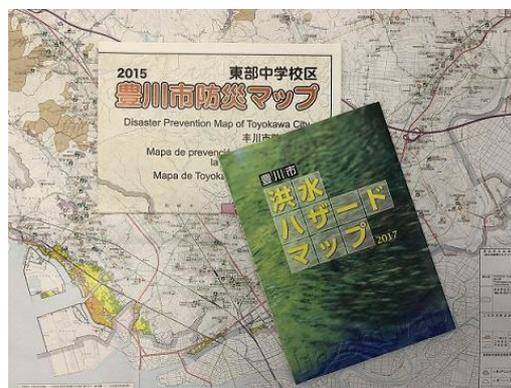


図25 豊川市防災マップと洪水ハザードマップ

に水はけの悪い場所ですが、区画整理以前の小字名は「前川」であり、他にも内水のはけにくい場所には、小田渚町「下垂」、国府町「流レ」、篠束町「仲堀」、院之子町「下川添」、当古町「下田」、宿町「水入」といったように低地にちなむ小字名が多く見受けられます。

(2) 土砂災害

土砂災害については、愛知県が土砂災害危険箇所情報を県のホームページ「土砂災害マップ」で公表しており、豊川市の防災マップでも、中学校区ごとに土石流危険溪流や急傾斜地崩壊危険箇所、地すべり危険箇所等を掲載しています。豊川市内には北部・西部を中心とした山間部や段丘端の崖面等に土砂災害危険箇所が小字単位で計 234 地区存在しますが（市HPの豊川市内土砂災害危険箇所情報より）、その小字地名に使用される文字から特徴的なものを拾い上げると図 26 のようになります（別町名で同じ小字名あり）。

ア行	●足：足見、●池：大池、池河内、●入：池ノ入、滝ヶ入、山ノ入、滝ノ入、十王ヶ入、竹入、●井：井谷沢、井上、浜井場、井ノ口
カ行	●貝津：酒屋貝津、昇貝津、広貝津、寺貝津、上貝津、●欠：欠下、●川・河：穴河、糠川、下川原、勝川、鳥川原、田川、池河内、●柿：柿木、柿木平、●岸：岸下、●崩：木崩、●窪・久保：水久保、●栗：栗原、●蛇：蛇塚(くちなわづか)
サ行	●沢・峡：東沢、西沢、登り沢、下り沢、検沢、井谷沢、一ノ沢、梨ヶ沢、牛沢、長谷沢、猿沢、西沢、深沢、西峡(ニシザワ) ●坂：親坂、高坂、国坂、●猿：奥猿田、猿沢、●下：諏訪下、下藤井、上ノ山下、欠下、野山下、下川原、権現下、下市、下谷下、下ノ坪、下室、下、●狭：狭石、倉狭間、大狭間、
タ行	●田：早稲田、鶴田、中田、ハリマダ、前田、門田、五反田、一町田、宮田、田川、祓田、木ノ田、三ツ田、佐田地、築田、後田奥、前田口、塩ノ田、神田、地藏田、奥猿田、雨田、後田口、石田、深田、油田、●谷：数谷原、上西ノ谷、長谷山、汲ヶ谷、長谷、井谷沢、向谷、下谷下、東ノ谷、岩ノ谷、長谷沢、●滝：滝ノ入、滝平、滝場、滝ノ入
ナ行	●根：赤根坂、横根、横根山
ヤ行	●山：観音山、長谷山、東山、向山、栗木山、上ノ山下、上ノ山、野山、遠見山、野山下、山ノ神、大宝山、横根山、勝山、山東、山西、山ノ奥、金山、山崎、御城山、寺山、丸山、東山、内山、平山、山陰、会下山、山本、藤ヶ山、上野山、御津山

図 26 豊川市内土砂災害危険箇所の特徴的な小字名

最も多いのは「山」の付く地名で 31 地区、次が「田」の付く地名で 26 地区、そして「沢・峡」の付く地名 14 地区、「下」の付く地名 12 地区、「谷」の付く地名 11 地区、「川(河)」の付く地名 7 地区、「入」の付く地名 6 地区、「貝津」のつく地名 5 地区と続きます。

こうしたことから、山間部で地名に「山」「田」「沢」「下」「谷」の付く場所で人家がある場合には特に注意が必要と言えます。また数は少ないものの、災害地名として次の地名には土砂災害等の注意が必要です。

- 「足」(悪し)のつく足見(金野)、●「欠」(欠けやすい所)のつく欠下(御油)、
- 「岸」(崖地形)のつく岸下(牛久保)、●「崩」(崩れ地)のつく木崩(平尾)、
- 「窪(久保)」(窪地)のつく水久保(千両)、●「蛇」(蛇地名は崩壊地名)のつく蛇塚(くちなわづか：広石)など

ちなみに土砂災害危険箇所でない地域でも、「欠」のつく小字名には欠間(当古)、欠下(六

角)、東欠間・西欠間(御油)、欠下(一宮・橋尾)、欠田(長沢)、欠山・欠田(小坂井)があり、該当地域に崖面等がある場合には注意が必要です。千枚田で有名な新城市四谷地区は鞍掛山の南西斜面にあり、明治37年7月の台風に伴う大雨では家屋10戸と田畑を流出する土砂災害があり11名の犠牲者を出しましたが、鞍掛の「カケ」も災害地名の一つとされています。また市内には、崩壊地名と言われる「窪・久保」には窪美(麻生田)、間窪(六角)、「崩」には崩(市田)、「蛇」には上蛇穴・下蛇穴(千両)もあります。

こうした土砂災害危険箇所や地名に注意が必要な場所にお住いの場合には、事前に防災マップをよく確認の上、大雨警報発令の際は、気象庁や愛知県から情報提供がある土砂災害警戒情報等に留意し、避難準備を心掛けてください。



図 27 新城市の四谷千枚田

(3) 地震・液状化現象

今後30年以内に70～80%の確率で起こるとされる南海トラフ地震については、理論上最大想定モデルでは、震度は下郷地域や沿岸部を中心に震度7、市街地の乗る上郷でも震度6強に見舞われると想定され、市内全域で建物被害は25,000棟、死者数は火災による死者も含め合計1,400人と想定されています。上郷の住宅密集地では家屋の延焼が、また下郷の低地や臨海部の埋め立て地では液状化による建物被害や道路やライフラインの被害も心配されます。また山間部では崖崩れや農業用ため池の決壊の心配もあり、沿岸では堤防が地盤沈下や液状化により崩壊し、津波被害を拡大させる心配もあります。

よって、巨大地震が実際に起きた際には、地震の強い揺れだけでなく、自宅周辺の崖崩れやため池決壊、液状化も考慮した避難を考えておく必要があります。液状化については、防災マップに震度想定とともに液状化危険度マップも併せて掲載してありますので、自宅周辺の震度想定、液状化危険度を一度確認してみてください(図28)。

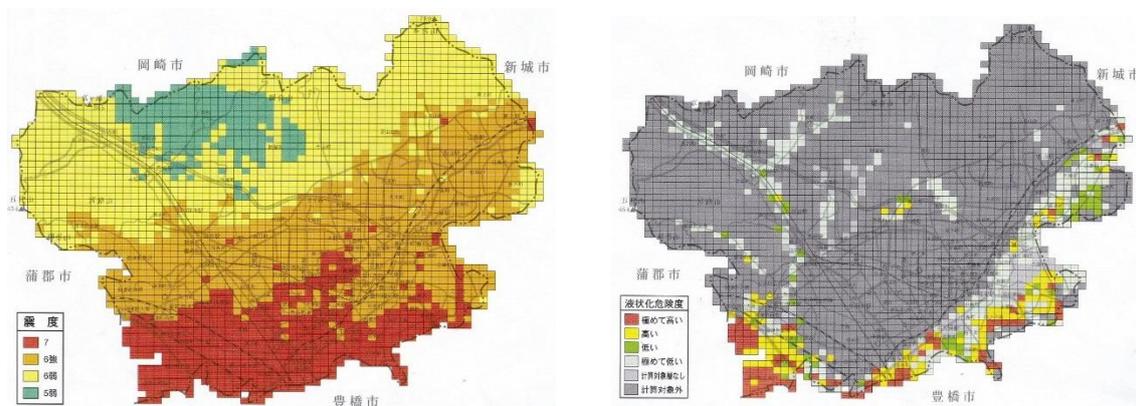


図 28 震度分布図(左)及び液状化危険度マップ(右) ※理論上最大想定モデルによる

地震の揺れや液状化に対し注意が必要な小字名としては、洪水でも指摘した旧河道にあたる「古川」や「カワラ(川原・河原・磧)」の付く地名が挙げられるほか、水田を埋め立てたり過去に沿岸部を開発した「田」や「新田」「浜」の付く地名にも注意が必要です。

ちなみに音羽川の最下流部（御所川）は、かつては安礼ノ崎と呼ばれた砂洲の東側を南流していたものが、江戸時代後期に改修され現在の流路に付け替えられましたが、御津町御馬の小字名には、かつての流路の場所に「梅田」「砂山」「洗出」の名が見られることから、「梅田」は「埋め田」を意味し、軟弱地盤地名と捉えることも可能です（図 29）。

また幕末の安政東海地震の記録では、「御馬村では潰屋（倒壊した家屋）や怪我人が多く、郷蔵も地盤が沈下して皆潰（全壊）した」「御馬村字音羽川通りでも地盤沈下が起こり、海水が流入した」とあり（人びとのくらしと災害）、沿岸部では地震の大きな揺れ、液状化とともに地盤沈下にも注意が必要です。



図 29 御馬村古図（左）、御馬周辺小字図（右）（御津町史より）

（４）高潮・津波

高潮の浸水想定については、愛知県のホームページの「愛知県高潮浸水想定」をご覧ください。室戸台風級の台風による三河湾沿岸部の高潮浸水想定が示され、御津町を中心に高潮被害の大きかった昭和 28 年の 13 号台風や昭和 34 年の伊勢湾台風の実績浸水範囲も併せて確認することができます。

（図 30）。

また南海トラフ地震の理論上最大想定モデルでは、御津町沿岸部

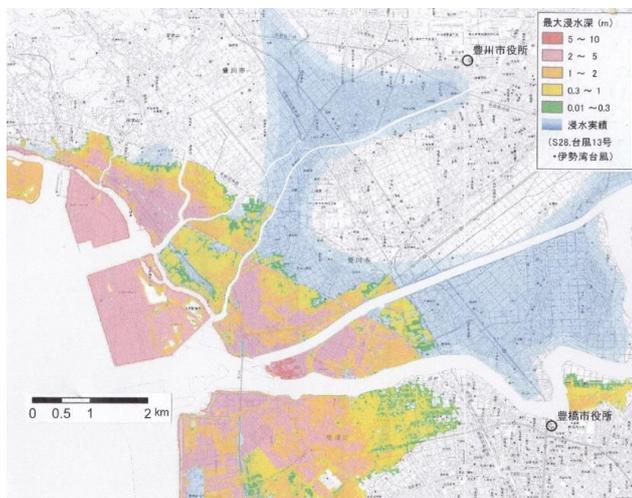


図 30 愛知県高潮浸水想定（愛知県 HP より）

での津波到達時間は最短 77 分、津波高は最大 3.5mと推定されており、安政東海地震の際の記録によれば地震による津波が来襲し、「御馬湊では船積前の廻米 500 俵が激波のために海に引き出された」「津波の波高はこれまでの大潮よりも 3~4 尺（約 90~120 cm）も高く、小坂井の堰（旧東海道沿い）まで繰り返して押し寄せた」とあり（人びとのとくらしと災害）、三河湾内と言えども、市内で過去に実際に津波被害があったことが知られます。

高潮や津波で特に注意したい地名としては「浜」や「塩」の名の付く沿岸部の地名が挙げられ、御津町内には浜田・塩浜（御馬）、下浜道・入浜・揚浜（西方）、浜新田（湊野）、西浜（大草）、前浜（赤根）といった「浜」の付く小字名が確認できるほか、塩入・塩浜（御馬）といった「塩」のつく小字名はかつて製塩を行っていた名残とされます。

こうした沿岸部では、過去に高潮・津波の被害を受けた苦い経験もあることから、鉄筋コンクリート製の沿岸堤防が整備された現在でも災害リスクがゼロとなった訳ではないことを肝に銘じておく必要があります。大型台風襲来の際には高潮注意報や高潮警報に注意を払い安全な場所への早めの避難を心掛けるとともに、巨大地震の際の津波についても、津波注意報や津波警報に注意を払い、自宅周辺の災害リスクを事前に把握しておいて、落ち着いた避難行動をとることが大切です。

皆さんも巻末の小字図で自宅周辺の地名を確認するとともに、地理院地図で自宅周辺の災害リスクをチェックし、災害を我が事として家族皆で防災・減災を心がけてください。

○参考文献・WEB 情報

- 福和伸夫 2010 「地名から地域性に思いを馳せ、土地に適った建物を作る」『Argus-eye』2010 年 10 月号
中根洋治 2012 『愛知の地名－海進・災害地名から金属地名まで』風媒社
谷川健一編 2013 『地名は警告する－日本の災害と地名』(株)富山房インターナショナル
豊川市桜ヶ丘ミュージアム編 2016 『人びとのとくらしと災害－古文書・古記録にみる豊川災害史－』
松岡敬二編 2016 『古地図で楽しむ三河』風媒社
文化庁編 2017 『日本人は大災害をどう乗り越えたか－遺跡に刻まれた復興の歴史』朝日選書 959
松岡敬二編 2018 『三河国名所図絵 絵解き散歩』風媒社
日本地名研究所監修 2018 『古代－近世「地名」来歴集』(有)アーツアンドクラフツ
近藤恒次補訂編 1980 『新訂三河国宝飯郡誌』国書刊行会
愛知県八名郡 1987 『八名郡誌復刻版』国書刊行会
豊川地域文化広場 1985 第 5 回特別展『豊川の絵図』
安藤勲ほか 2003 「豊川市内の旧町村名の起源考」『豊川史話』第 9 号 豊川市郷土史研究会
豊川市 2003 『新編豊川市史』第 7 巻 資料編 近代
一宮町 1976 『一宮町誌』
音羽町 1975 『音羽町誌』
御津町 1982 『御津町史』資料編 下巻
小坂井町 1976 『小坂井町誌』
平凡社 1981 『日本歴史地名体系』23 愛知県の地名
角川書店 1989 『角川日本地名大辞典』23 愛知県
豊川市ホームページ「豊川市洪水ハザードマップ」「豊川市防災マップ」「豊川市土砂災害危険箇所情報」
愛知県ホームページ「土砂災害マップ」「愛知県高潮浸水想定」
国土地理院ホームページ「防災にも役立つ！地理院地図の使い方」等

○豊川市域の旧村名の由来一覧

村名	地名の由来（ <u>下線は地形・土地利用や災害に関するもの</u> ）	備考
楽筒村 ガクンドウ	慶長9年(1604)の検地の際は「がくの道村」と記す。村の東を流れる豊川瀬が崖（土手）であったことから地名となったか。または鎌倉街道があった時代に、案に渡ることができる「楽渡」が「楽筒」となったか（豊川史話）。	明治11年に楽筒村と楠木村が合併し二葉村に（現二葉町）
楠木村 クス(ノ)キ	楠木と麻生田の境に楠の大木があり村名になったと伝えられる（豊川史話）。	上に同じ（現二葉町）
向河原村 ムコウガワラ	かつては賀茂村との間に豊川の渡しがあり、向河原は豊川対岸の賀茂村方面から呼ばれた地名と考えられる（豊川史話）。	現向河原町
麻生田村 アソウダ	古文書から鎌倉時代には一宮（砥鹿神社）領内「麻宇田村」と表記されたことが知られ、その昔祭裏に麻を献上した故事から村名となったと伝えられる（宝飯郡誌）。	現麻生田町
谷川村 ヤガワ	村の東側（現松原用水沿い）を豊川の分流が流れていたため「野河村」（谷川神社の慶長11年の棟札）と呼ばれ、やがて「谷川」になったか。あるいは大雨の時段丘上から野水があふれ「矢川」と呼ばれたためか。ちなみに昭和25年の改修工事で荒川が佐奈川に合流して野水被害はなくなった（豊川史話）。	現谷川町
牧野村 マキノ	鎌倉時代に豊川宿（古宿町周辺か）に公用馬が配置されたという。この馬の飼料用の草地があったことから牧野の村名となったか（豊川史話）。ここは東三河地方に勢力を拡大した牧野氏の最初の本拠地であり、豊川旧流路の分流点に牧野城が築かれ、地名を氏族の名前に採用したとされる。	現牧野町
三橋村 ミツハシ	かつて豊川は乱流し、三橋村の西側・東側を流れたり今の豊川本流を流れたりして三つの流れの中にある地ゆえに三ツ橋の地名となったか（豊川史話）。	明治17年に三ツ橋村・雨谷村・石原村が合併し三谷原村に（現三谷原町）
雨谷村 ウヤ	『三河国神名帳』にある「温谷天神」が村内の素戔鳴神社か。永禄5年の今川氏真安堵状には「宇谷」とあり、温谷（オムヤ）が後に宇谷（ウヤ）と呼ばれ「雨谷」の文字を宛てたと考えられる（豊川史話）。	上に同じ（現三谷原町）
石原村 イシハラ	地名の由来には神社勧請にまつわる説や住人の姓を村名に宛てた説など諸説があるが不詳（豊川史話）。	上に同じ（現三谷原町）
埴之上村 マモノウエ	かつて豊川の分流は埴之上村の北側から西南方に流れており、村は斜面（ママ）上の地であったため地名となったか。同村の中央部の低地に埴下と呼ぶ小字もある（豊川史話）。	明治11年に埴之上村と三渡野村が合併し三上村に、豊川市合併前は八名郡（現三上町）
三渡野村 ミトノ	和泉式部の歌に詠まれた「緑野池」が村内にあったとされ、緑野から転じて三渡野になったともいうが詳細は不詳（八名郡誌）。	上に同じ（現三上町）
当古村 トウゴ	当古の地は古代から東も西も豊川の流れを渡って出入りする郷であったので、「渡古」か「渡郷」が後世に「当古」の文字を宛てたか。近世～近代にかけ姫街道の渡船場があった（豊川史話）。	現当古町
土筒村 ドウドウ	『三河国神名帳』にある「東堂大刀天神」の所在地を土筒と考え「東堂」が「土筒」になったとする説と、村の周囲が豊川の分流の跡地で急斜面の土塙（土手）となっていたので「土筒」の文字を宛てたとの説がある（豊川史話）。	かつては八名郡に属したこともある 現土筒町
犬之子村 イヌノコ	南北朝時代に南朝の某院法皇の皇子龍岳禪師が戦乱の地を避けて従者とともに入来したとの伝説から院之子とか皇の子と呼ばれていたが、高貴な尊名を憚り犬之子の文字を宛てたと伝えられる（豊川史話）。昭和8年に院之子と改称。	かつては八名郡に属す 現院之子町
馬場村 ババ	豊川宿に配置された公用馬の馬場あるいは宿役人の番場が地名の由来とも言われるが不詳（豊川史話）。	現馬場町
豊川村 トヨカワ	『和名抄』に豊川郷の名がみえる。平安時代中頃から「しかすがの渡（小坂井・平井辺り）」が豊川の水量の増加で難所となり、東西の交通は豊川の上流を迂回する新街道（俗に鎌倉街道と呼ばれた）に移り豊川（河）宿（豊川村東南部と牧野村・馬場村の接する辺り）が成立した（豊川史話）。明治初年に村内には矢作、米ノ座、中町、本町、門前、若宮、新屋の地名があったとされる（宝飯郡誌）。	現豊川町
古宿村 フルジユク	『東関紀行』の仁治3年(1242)の記録に「豊川宿は荒れ果て」とあり、13世紀中頃に東西交通は再び「しかすがの渡」に戻ったことが確認される。後世の人がかつての豊川宿の場所を古宿と呼んだか（豊川史話）。	現古宿町
北金屋村 キタカナヤ	古くは一色と称したが、やがて鍛冶の多く住む元一色を鍛冶村、鑄物師の多く住む南北の一色を南金屋村・北金屋村と呼ぶようになったという（豊川史話等）。	現金屋町
三蔵子村 サンゾウゴ	三蔵子は江戸時代には三尊郷、三尊古、三蔵古とも呼ばれた。明治以降は三蔵子としているが、「三尊」の由来は行基作の三尊の霊仏ほか諸説あり（宝飯郡誌）。	現三蔵子町
六角村 ロウカク	千両山麓に行く道の門（出入口）の地である麓門（ロクカド）に六角の文字を宛てたか、または周辺の六カ村に行くことのできる道の門から六角となったか（豊川史話）。「六角の角を有する犬頭を埋めた所」との伝説もあり（宝飯郡誌）。	現六角町

長草村 ナガクサ	長草の地名の由来は不詳だが、 <u>広い地が長い草原であったゆえに村名となったか</u> （豊川史話）。	現長草町
樽井村 タルイ	村の西側を流れる佐奈川は平時は水量が少なく、飲み水を樽に汲み溜めし上水を使ったゆえに樽井の村名となったとも言われる（豊川史話）。ちなみに佐奈川の「サナ」とは七輪の火をのせる格子形の棚のことで、水漏れ川を意味する。	現樽井町
上・下千両村 カシミモチギリ	『今昔物語』の犬頭の糸の説話にちなみ献上する白糸が千両に値するため千両としたとの説や、集落を上下に分けチギリしたので「千両」と書きチギリと称した、あるいは山林地ゆえに千木里（チギリ）と称したとの諸説あり（豊川史話）。中根洋治氏は、「千両」は「ちぎる」に通じ崩壊地名の一つとしている。	現千両町
大崎村 オオサキ	穂ノ原から本野が原と呼ばれたこの野原の内にある大きい崎の地（扇状地先端）であることから地名がついたか（豊川史話）。犬頭の糸説話の「蚕犬」の尾を埋めた地として尾崎村とし、後に大崎村となったとの伝説もあり（宝飯郡誌）。	現大崎町
本野村 ホンノ	古くは穂ノ村と称し（宝飯郡誌）、八幡村から豊川村あたりにかけて広がっていた本野が原の内にあることから本野と名付けたと考えられる（豊川史話）。	現本野町
瀬木村 セギ	古くは真木村と称し、川の瀬近くに大樹があったので瀬木と呼んだとか、井川（松原用水）に堰がありこれが地名となったとの諸説がある（豊川史話）。井川は江戸時代によく氾濫し、中根洋治氏は災害地名として瀬木は「流れをせき止めた所」としている。	現瀬木町
西島村 ニシジマ	明応東海地震（1498年）に伴う豊川の流路の変更により西島の地名が起こったと伝えられ（宝飯郡誌）、村の東側は井川、西側は段丘沿いの湧水が川となり、周囲は湿地か田地で豊川域の西の島であるため西島としたか（豊川史話）。	現西島町
柑子村 コウジ	神田地名の伝承から御菌であったとの説もある。河淵の地を香淵と書き、後世「柑子」の文字を宛てたか（豊川史話）。	現柑子町
行明村 ギョウメイ	中世には行明・柑子・正岡辺りを星野庄あるいは行明郷と称したと言い、地名の由来ともいわれる『太平記』等にみえる「星野行明」は、下郷で勢力を有した星野氏と行明氏の両者を指すと考えられている（新編豊川市史第一巻）。	現行明町
正岡村 マサオカ	集落の周辺が水田地帯で岡島と称したものが、島ではなく岡であるというので正岡の地名になったか（豊川史話）。	現正岡町
(下)長山村 シモナガヤマ	鎌倉時代の文応年中（1260～1261）に長山と称すようになったと伝えられ、上郷の丘陵地一帯が藪・樹木等の森林地帯が長く続いていた土地ゆえに長山と呼ばれたか（豊川史話）。	現下長山町（宝飯郡には長山村が2つあったため明治8年に上下に区別した）
牛久保村 ウシクボ	『和名抄』にみえる宮島郷にあたる考えられ、室町時代には周辺が一色あるいは常寒（トコサブ）と呼ばれ、明応2年（1493）に牧野古白が波多野全慶を討って一色城に入城の途中、金色清水辺りの窪地に牛が寝て道を塞いでいたのが、入城の行列を見て道を開いたため吉兆なりとして牛窪と改称、後に牛久保に改めたとされる。中根洋治氏は牛の語源を「憂し」と考え、河岸段丘沿いの崩壊地名の一つと考えており、窪（久保）は軟弱地盤地名でもある。	現牛久保町・光輝町・弥生町
鍛冶村 カジ	古くは一色村といい、後に鍛冶村と改称したとされる。『三河国神名帳』にある「加知天神」は鍛冶村の金山彦神社（中条神社）とされ、古代から中世にかけての地に鍛冶職が発展していたとされる（豊川史話等）。	明治17年に鍛冶村と南金屋村が合併して中条村に（現中条町）
南金屋村 ミナミカナヤ	室町時代における一色郷の鍛冶村と南北金屋の分村時期については諸説あるが、鋳物師の多く住む南北の一色を南金屋村、北金屋村と改称したとされる（豊川史話等）。	上に同じ（現中条町）
市田村 イチダ	伊知多神社境内には「郡（こおり）明神」が祀られ、周辺に古代の宝飯郡家（ぐうけ：郡の役所）があったともされ、郡家または郡明神に最初から米を献上した田地があるのでノ田が市田になったか（豊川史話）。	現市田町
野口村 ノグチ	穂ノ原が本野が原と呼ばれるようになり、本野が原の西部の出入り口には、早くから八幡、白鳥等の地があったので野口の地名が付いたか（豊川史話）。	現野口町
八幡村 ヤワタ	当地は八幡宮鎮座の地なるを以て八幡村と称したという（宝飯郡誌）	現八幡町
白鳥村 シロトリ	村名の由来は、奈良時代における三河国から朝廷への白鳥献上に求める説と、『三河国神名帳』にみえる白鳥大明神の所在地に求める説がある。文安年中（1444～1449）に尾張国大高城主山口次郎兵衛定次が来住した際には当村を前崎（舌状台地の形状からか）と称したと伝えられる（宝飯郡誌）。	現白鳥町
久保村 クボ	鎌倉時代に久保と称するようになったと伝えられ、久保は国府（府中）の分村であり、高貴な地名を永久に保ち伝えるように久保としたか（豊川史話）。また「窪村」と表記されたこともあり、村内西南部が音羽川沿いの低地（クボ）にあたるため、軟弱地盤地名の窪（久保）となったとも考えられる。	現久保町
平尾村 ヒラオ	平尾と稲束の地が合併して平尾村と称したという。平尾は、その地形から平地の終わりの地であることから起こった地名か（豊川史話）。	現平尾町

財賀村 ザイカ	財賀寺は鎌倉時代初期に三河七御堂に数えられた古刹であるが、村名の由来は定かではなく、萩村地内の路傍の観音石像の傍らに「右門谷村」と刻まれる道標があることから、財賀村周辺は門谷村と称した時期もあったとされる（宝飯郡誌）。	現財賀町
御油村 ゴユ	地名の由来は、古記に「本村椿屋敷より油を禁中に奉る」とあり、かつて油を製造する者がいて御所にたびたび献納したことからという（宝飯郡誌）。	現御油町
国府村 コウ	字的場に豊成公跡があり、霊亀養老年間頃に藤原豊成という公卿が在住した跡といわれ、国家鎮護のために守公神社を勧請したという（宝飯郡誌）。守公神社の応永23年（1416）の古鐘には「宝飯郡府中守公神」とあり、室町時代には府中と呼ばれ、白鳥・八幡にかけての一角が古代～中世の国府・国衙や守護所であったことから村名となったと考えられる。	現国府町
森村 モリ	村内に望理神社があり『和名抄』にみえる望理郷が森村の故地とされる。望理は安閑天皇の名代勾部との関係でマガリと読み⇒マウリ⇒モリと転じたとの説もある（豊川史話）。	現森一丁目～五丁目
小田淵村 オダフチ	『三河国神名帳』の小田天神が淡州（アワシマ）神社に比定でき、音羽川の旧流路とされる安藤川の川縁に小田天神があったため村名となったか（豊川史話）。小田淵村の出郷に桜町あり。	現小田淵町
為当村 タメトウ	村内稲荷神社の永禄12年（1569）の棟札には「渡津庄多米当村」とあり、為当から小田淵辺りは条里制水田の広がる穀倉地帯であったことから「多米当」と名付けられたか（豊川史話）。	現為当町
江村 エ	当初「江尻村」と称し慶長の頃「江村」に改めたとされる。豊田珍比古『三河百話』では「江人」が居住していたため村名となったとする。	明治11年に鵜飼島村と合併して江島村に（現江島町）
鵜飼島村 ウカイシマ	かつて豊川の鵜を用いて鵜飼が行われたため村名となったが、大洪水で豊川の川筋が変わり鵜がいなくなったとの言い伝えあり（宝飯郡誌）。豊田珍比古は『三河百話』で鵜飼部との関わりを指摘する。	上に同じ（現江島町）
御園村 ミノ	『神風抄』（伊勢神宮の領地を記した中世の記録）に載る泉御園の故地とされるが定かではない（平凡社日本歴史地名大系）。	明治11年に八名郡御園村と養父村が合併して金沢村に（現金沢町）
養父村 ヤフ	『和名抄』にみえる古代の養父郷に比定される。地名の由来については、養父を藪の意に解して自然の様子から付けたとも、養父族（本国但馬丹波族日下部氏流）が古住したからとも言うが詳細は不詳（一宮町誌）。	上に同じ（現金沢町）
東上村 トウジョウ	往古は東城村と表記したこともあると言う（宝飯郡誌）。地名の由来は不詳。	現東上町
北岡新田 キタオカ	寛永7年（1630）に松原村の庄屋勘太郎が分村して開発した村であり、松原村から見て北側の岡の上に位置することから名づけられたと考えられる。	明治9年東上村へ合併 現東上町
（上）長山村 カミナガヤマ	三河守藤原長山が三河国在任中に長山荘を開墾しそのまま土着し長山という地名がついたと言うが不詳（角川日本地名大辞典）。	現上長山町（宝飯郡には長山村が2つあったため明治8年に上下に区別した）
松原村 マツバラ	松原の名称の由来は不詳。ちなみに松原用水は当初橋尾村の豊川に堰を作り取水し、後に堰の位置が草加部村、そして松原村へと上流域に移動し松原用水と呼ばれるようになった。	現松原町
草加部村 クサカベ	日下部村と記すこともあった。雄略天皇の皇后草香幡皇女（仁徳天皇の子）のために設けられた名代クサカベを地名にしたとの説がある（角川日本地名大辞典）。	かつては八名郡に属す 現豊津町
中島村 ナカジマ	豊川の大洪水による地形の変化が地名になったと考えられている（角川日本地名大辞典）。	上に同じ（現豊津町）
井之島村 イノシマ	豊川沿いの低地に立地するが、村名の由来は不詳。	上に同じ（現豊津町）
橋尾村 ハシオ	地名の由来は、北方を通る鎌倉道に橋が架かっていたことからはじめ橋尻と称し、後に橋尾に改称したと伝える（角川日本地名大辞典）。	かつては八名郡に属す 現橋尾町
一之宮村 イチノミヤ	一之宮の地名の由来は地内に鎮座する砥鹿神社が三河国一宮であったことによる（一宮町誌）。	現一宮町
大木村 オオキ	大木の名称の由来は不詳。	現大木町
足山田村 アシヤマダ	地名の由来は、かつては葦が山の田によく繁茂していたことから転じて足山田になったと言われているが不詳（角川日本地名大辞典）。中根洋治氏は足山田村の「足」を「悪し」地形に通ずるとして災害地名の一つとしている。	現足山田町
西原村 ニシハラ	大木村の新城街道沿いの集落から見て西側の原野のため西原と称したか。	現西原町
篠田村 シノダ	地名の由来は、かつては水田の端にシノ（小さな笹）が良く繁茂していたからともいわれるが不詳（一宮町誌）。	現篠田町
赤坂宿(村) アカサカ	『和名抄』にみえる「宮道」や伊場木簡の「宮地の駅」を赤坂に比定する考えがある。赤坂の名称は地面が赤土で坂があるためと言われるが不詳（音羽町誌）。	現赤坂町
萩村 ハギ	萩の名称の由来は不詳。山地を抱え、土砂災害の危険箇所も多く、「土が剥がれやすい所」として「はぎ」とした崩壊地名の可能性もある。	現萩町

長沢村 ナガサワ	長沢村は昔乙葉村と呼ばれたが後に長沢村と改められたという。現在の下谷下川は昔乙葉川と呼ばれたことが古図で確認でき、現在も「音羽」の小字名が残る。長沢の由来は長い沢があるためと言われるが不詳（音羽町誌）。	現長沢町
上佐脇村 カミサワキ	かつて海が近くに迫っていた頃、波風が騒ぐことから「さわき」になったとされる（角川日本地名大辞典）。	現御津町上佐脇
下佐脇村 シモサワキ	上佐脇に対し下佐脇と称した。また文政元年（1818）には沿岸部に下佐脇新田が開発された（宝飯郡誌）。	現御津町下佐脇
御馬村 オンマ	御馬とは朝廷などの牧場である御牧の馬をさし、それから出た地名と考えられるが不詳。また以前は引馬または引馬郷と言ったとされる（角川日本地名大辞典）。	現御津町御馬
西方村 ニシガタ	地名の由来は、干潟の存在から西潟と称し、それが西方になったという（宝飯郡誌）。	現御津町西方
坪野村 ナギノ	坪野の由来は、昔飯盛長者が愛児を失い日夜泣き悲しんでいたところ行脚中の行基によって救われ一寺を建立し、泣野（鳴野）が転訛したものという。また「万葉集」の安礼の嶺の歌に対しこちらは地勢上波静かなため「なぎの」といったとも言う（角川日本地名大辞典）。	現御津町坪野
大草村 オオクサ	大草村の村名の由来は不詳。中根洋治氏は大草は低湿地を表し、稲が腐りやすい所として幸田町大草や田原市大草等を挙げている。	現御津町大草
赤根村 アカネ	地名の由来は、かつてあかね草が繁茂していたことから転じて赤根になったと言う（角川日本地名大辞典）。	現御津町赤根
広石村 ヒロイシ	旧宝飯郡御津町域は『和名抄』の御津郷に比定され、広石村内には式内社である御津神社があり、かつては周辺の村々を含め「御津ノ庄」と呼んでいた時代もある。広石の由来は広磯の転訛で、昔海がこの辺りまでできていたとされ「船津」などの小字名が残る（角川日本地名大辞典）。	現御津町広石
茂松村 シゲマツ	地名の由来は、東方山頂の茂松城跡の城内に老松が2本あり互いに茂り合うため茂松、あるいは2本が重なり合うので重松と言うようになったと伝える（宝飯郡誌）。	明治11年に茂松村と森下村が合併して豊沢村に（現御津町豊沢）
森下村 モリシタ	南北朝の頃、波多野行近という人が秦野（神奈川県）から三河に移り森下に住んだので森下氏とも言った。波多野一族は森下を拠点に御津庄の荘官になったと伝えられる（宝飯郡誌）。	上に同じ（現御津町豊沢）
灰野村 ハイノ	地名の由来は草壁皇子の菩提を弔うため建立された宮路寺が兵火に焼かれたことから名づけられたとの伝承がある。鎌倉時代初頭の『吾妻鏡』に出てくる羽渭（はいの）庄に比定される（角川日本地名大辞典）。	明治11年に灰野村と金割村が合併し金野村に（現御津町金野）
金割村 カナワリ	弁慶が国分寺の鐘を持ってきたところ、鐘が国分寺が恋しいと鳴るので、怒って叩き割ったため、中山邑の村名が鐘破（かなわり）村になったとの言い伝えがあり、慶長検地帳にも鐘破の文字がみえる（宝飯郡誌）。	上に同じ（現御津町金野）
小坂井村 コザカイ	『和名抄』にみえる度津郷に比定され、小坂井の地名は段丘に沿って小さな坂道と地下水の湧き出る泉の多いことに由来するという（小坂井町誌）。	現小坂井町
篠東村 シノヅカ	『和名抄』にみえる篠東郷に比定され、篠東の地名は、篠竹の繁茂する塚（古墳）があったこと、また篠竹を刈り束ねて矢を作ったことから名づけられたという（宝飯郡誌）。	現篠東町
宿村 シュク	地名の由来は、『和名抄』にみえる度津郷の一部で宿場があったからという（宝飯郡誌）。	現宿町
平井村 ヒライ	平は平地、井は泉を意味し、小坂井台地末端の泉の湧く地として平井の名がおこったとされる。小坂井や平井の泉は長い間共同の洗い場として利用されてきた（小坂井町誌）。	現平井町
伊奈村 イナ	若宮八幡社の縁起によれば室町時代に本多某という者が信濃国伊那郡より移住してこの地を拓いたので村名を伊奈としたとある他、人家と田が増えるに従って稲叢（いなむら）が並び村名になったとも言う（宝飯郡誌）。	現伊奈町

※（ ）内は主な参考文献で、（豊川史話）は『豊川史話』第9号、（宝飯郡誌）は『三河国宝飯郡誌』の略。

旧町村小字図

- (1) 豊川町 (麻生田・谷川・向河原・豊川・古宿・北金屋・本野・三蔵子・樽井・長草・六角・大崎)



豊川市内の小字名

○本小字地図は、昭和十年から十二年に刊行された町村別「土地宝典」(帝国市町村地図刊行会)にもとづいて作成した。

(3) 牛久保町



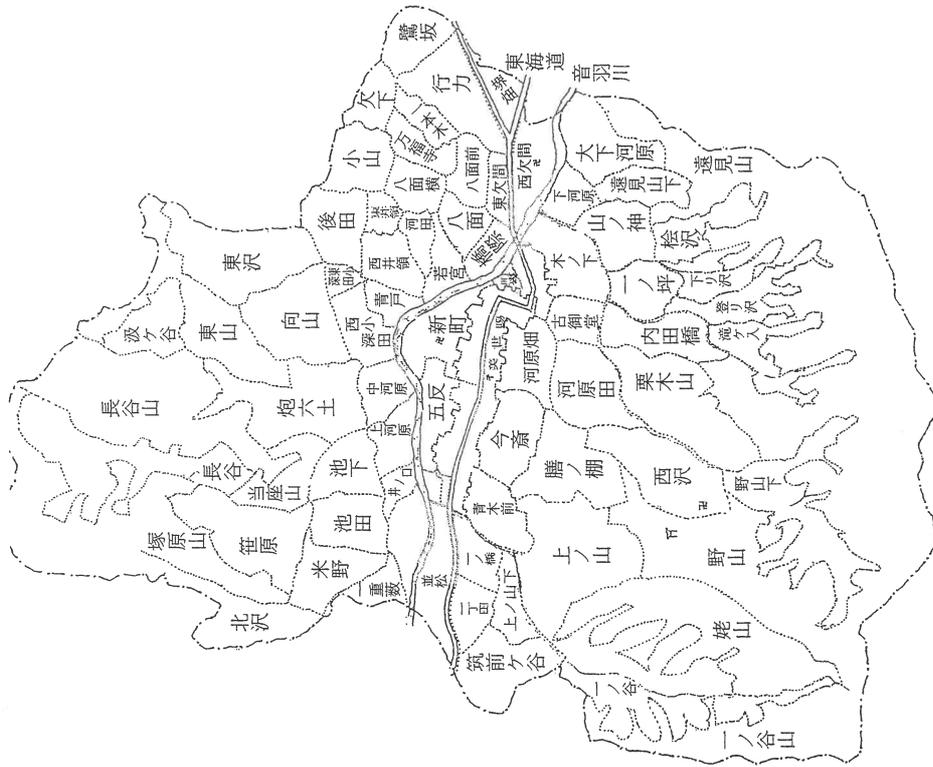
■旧榑川市域旧町村別小字図(3) ※『新編榑川市史』第7巻資料編近代より

(4) 八幡村 (千両・財賀・平尾)



■旧豊川市域旧町村別小字図 (4) ※『新編豊川市史』第7巻資料編近代より

(7) 御油町



小字数小計

豊川町	307	八幡村	233	
牛久保町	145	御油町	74	
国府町	133	三上村	80	合計
				972

- 【一之宮】
 1 室川
 2 大池
 3 上新切
 4 野添
 5 亥子角
 6 大フ口
 7 西垣内
 8 欠下
 9 宮前
 10 下新切

- 【篠田】
 1 上屋敷
 2 新居東
 3 並松
 4 竹之後
 5 番匠田
 6 仲田
 7 下川
 8 葉前場
 9 雲京
 10 吉井戸
 11 石橋
 12 東荒古
 13 中庄名
 14 上田尻
 15 下田尻
 16 田尻
 17 土土川
 18 弘法野
 19 割塚
 20 新屋浦
 21 四ツ家
 22 新切
 23 市道

- 【大木】
 1 鎌水
 2 石道
 3 荒屋
 4 新町通
 5 横町
 6 大坪
 7 下縄手

- 8 小橋詰
 9 新道
 10 砂田
 11 川尻
 12 向山
 28 西城下
 29 東城下
 30 山舞シ
 31 内山
 32 黒谷

- 【西原】
 1 飛越
 2 五倍子木
 3 吉影
 4 百間
 5 金剛谷
 6 榎田
 7 金次
 8 寺部
 9 岡ノ上
 10 松葉
 11 重藤
 12 水上

- 【足山田】
 1 山崎
 2 仲田
 3 八ツ田
 4 五反田
 5 小金
 6 御所貝津
 7 滝場
 8 奥滝場
 9 上荒子
 10 藤棚
 11 滝山
 12 西川
 13 門田
 14 若宮
 15 年長
 16 下平
 17 北荒谷
 18 上平
 19 西才原
 20 東才原
 21 上才原
 22 葉崎

- 23 仲野
 24 黒塚
 25 深田
 26 小間沢
 27 向山
 28 西城下
 29 東城下
 30 山舞シ
 31 内山
 32 黒谷

- 【上長山】
 1 東水神平
 2 西水神平
 3 宝川
 4 野添
 5 火防
 6 白鳥前
 7 上之平
 8 赤羽根
 9 後田
 10 小南口原
 11 小南口
 12 西原
 13 西新屋
 14 東新屋
 15 南田
 16 白屋
 17 藤八
 18 六郎辻
 19 上新屋
 20 宮之前
 21 田川
 22 南宝地
 23 北宝地
 24 井上
 25 大山
 26 手取
 27 奥三手川
 28 中三手川
 29 下三手川
 30 東原

- 31 大東原
 32 新道下
 33 一ノ沢
 34 割田
 35 下割田
 36 土橋
 37 本宮下

- 【東上】
 1 北岡
 2 丸塚
 3 柿木道下
 4 柿木
 5 柿木平
 6 百楽
 7 松本
 8 中河原
 9 宮沢
 10 櫛ノ木
 11 漆畑
 12 上河原
 13 大屋敷
 14 下手
 15 東京寺
 16 北田
 17 井谷沢
 18 権現
 19 滝ノ入
 20 滝ノ入
 21 井戸入
 22 柏沢
 23 勝川
 24 徳台
 25 平松
 26 炭焼平
 27 土橋
 28 炭焼
 29 日影
 30 本宮山

- 【江島】
 1 下之郷
 2 西脇
 3 北浦
 4 新田
 5 一ノ坪
 6 馬洗
 7 成天
 8 川久古
 9 立合
 10 奥川原
 11 築地
 12 三玉
 13 下川原
 14 下藪
 15 新屋
 16 東新屋
 17 下新田
 18 後川原
 19 金山
 20 外貝戸
 21 寺裏
 22 上外川原
 23 五反田
 24 広瀬
 25 川ヶ浦
 26 東海戸
 27 三反畑
 28 社宮神
 29 池尻
 30 高畑
 31 岡下
 32 中脇
 33 ママ下
 34 稲葉
 35 藤ノ木

- 【松原】
 1 嶋河原
 2 宝河
 3 近畑
 4 京田
 5 南貝津
 6 下河原
 7 養父境

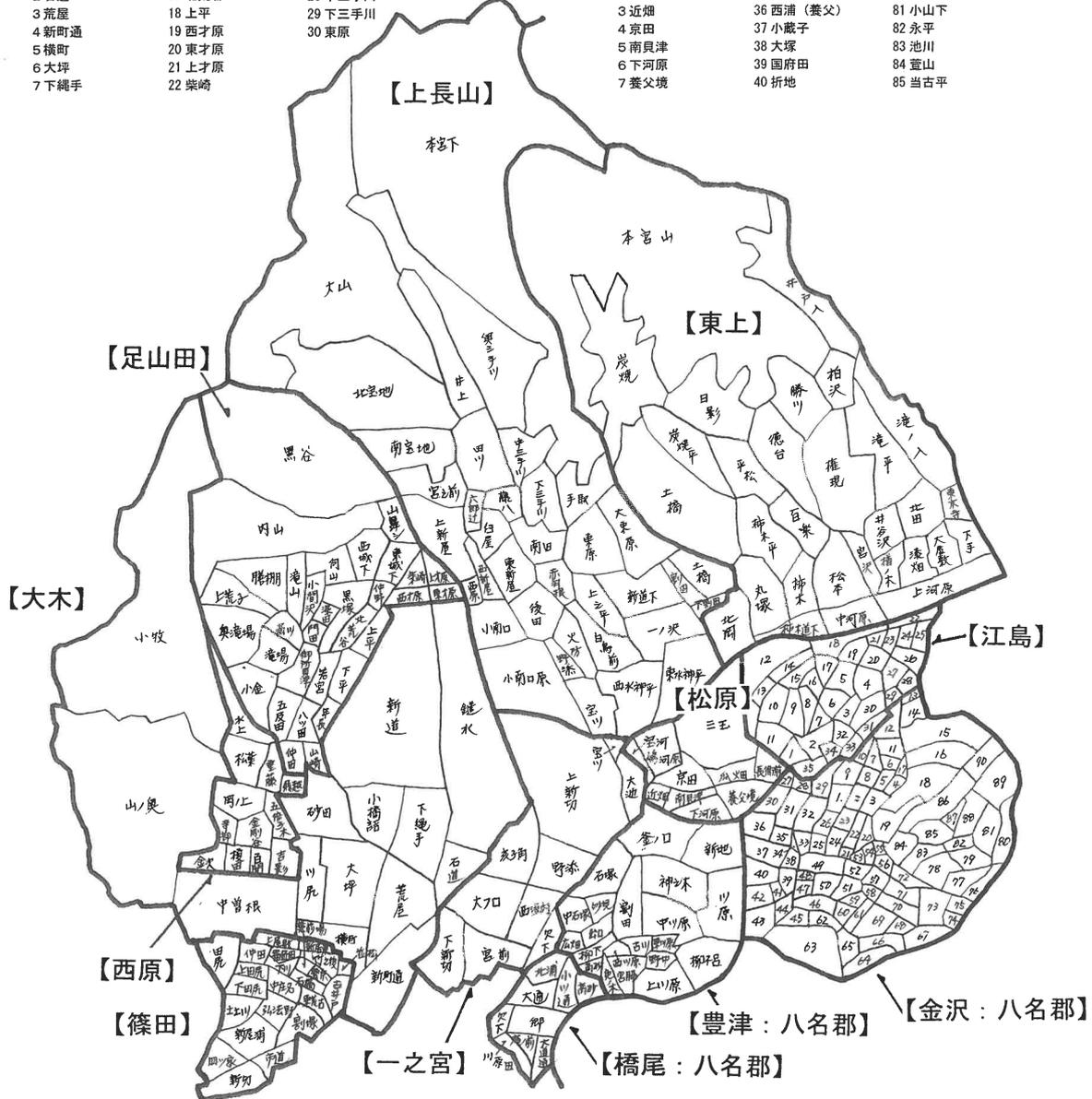
- 8 長衛前
 9 瓜畑
 10 三玉
- 【金沢：八名郡】
 1 西浦（御園）
 2 中道
 3 下鳥居
 4 荒神場
 5 宮東
 6 万所
 7 宮北
 8 番場
 9 川久胡
 10 埋上（ママ上）
 11 岡畑
 12 岡下
 13 池田
 14 段林
 15 藤弦
 16 滝ノ入
 17 新屋敷
 18 弁天下
 19 稲場
 20 竹下
 21 藤ノ木
 22 東浦
 23 内貝津
 24 南畑
 25 金山
 26 外貝津
 27 北浦
 28 供養塚
 29 神ノ木
 30 上川原
 31 市場
 32 高安
 33 池端
 34 大道
 35 一町畑
 36 西浦（養父）
 37 小戴子
 38 大塚
 39 国府田
 40 折地

- 41 江川
 42 中川原
 43 下川原
 44 村下
 45 西峽
 46 神田畑
 47 栗地畑
 48 天王
 49 丸街道
 50 薬師地
 51 松下
 52 丹茂
 53 川井野
 54 柿ノ木
 55 市川
 56 駒ノ前
 57 榎田
 58 笠尾
 59 番匠畑
 60 桜島
 61 年田
 62 段戸
 63 大岡山
 64 小照山
 65 宗新
 66 向平
 67 石雁平
 68 南山田
 69 大口
 70 横枕
 71 鎌田
 72 堤下
 73 京田
 74 東山
 75 井戸下
 76 追分
 77 二子塚
 78 松平
 79 水引
 80 小山
 81 小山下
 82 永平
 83 池川
 84 萱山
 85 当古平

- 86 跡坂
 87 焼荒
 88 滝下
 89 滝平
 90 茶臼

- 【豊津：八名郡】
 1 広畑
 2 出口
 3 中石塚
 4 妙見
 5 石塚
 6 釜ノ口
 7 神ノ木
 8 割田
 9 中川原
 10 古川
 11 柳下
 12 高砂
 13 免ノ木
 14 西川原
 15 上川原
 16 宮脇
 17 野中
 18 東川原
 19 柳不呂
 20 川原
 21 新地

- 【橋尾：八名郡】
 1 郷
 2 庵ノ前
 3 大道通
 4 川原田
 5 欠下
 6 大通
 7 北浦
 8 小川通
 9 高砂

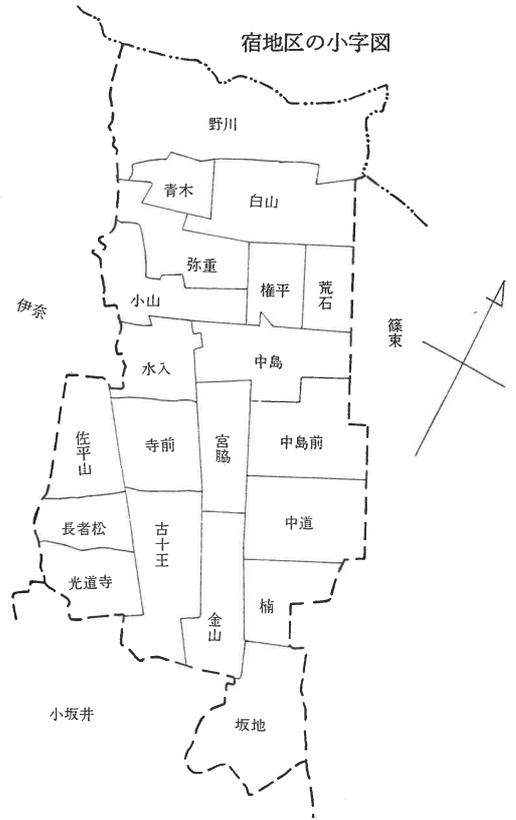


■旧一宮町域大字別小字図 ※明治22年土地台帳付属地図等により今回作成

伊奈地区の小字図



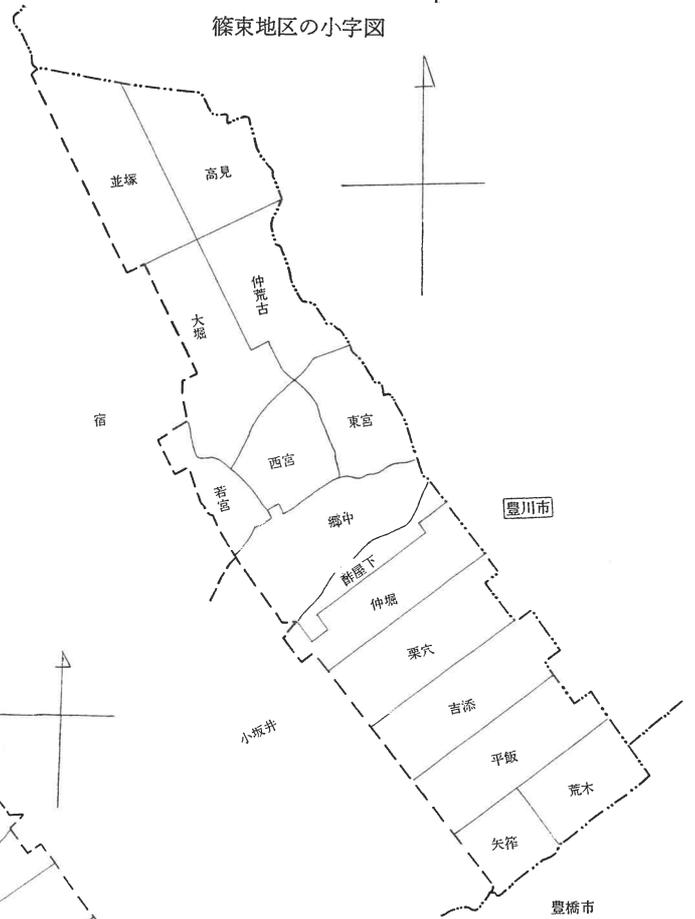
宿地区の小字図



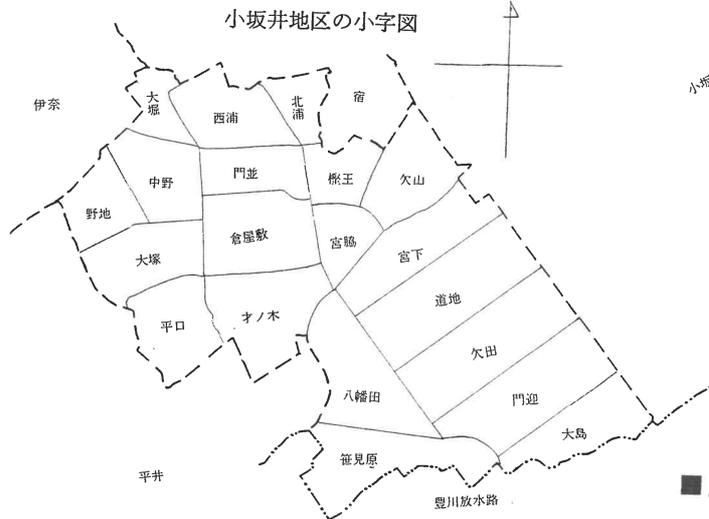
平井地区の小字図



篠東地区の小字図



小坂井地区の小字図



※『小坂井町誌』より

■旧小坂井町域大字別小字図